

学校教育とESD③

教育の明白

21世紀を生きる

ESD編 >>>>> ③

いよいよ従来の教科学習を中心とした知識・理解を上手に教え込むとする教育から、各教科・領域等

文部科学省が調整中の資料「学習指導要領等の構造化のイメージ図」を見て大変に驚いた。教科学習・総合的な学習・特別活動・道徳教育を隔てる線(壁)が一切取り払われ、「教科等間の往還(カリキュラム・マネジメント)」の重視が示されていたのである。

「学校丸ごと総合化」に方向転換

時間(以下「総合」)の創設時に示され、新しい時代を開く学びの在り方として大いに注目されていた。しかし、そのカリキュラム作りは地域や子供たちの実態を生かすために各学校に任されていた。その結果、都内でも様々な実践を工夫し、研究発表までした学校がある。内容も学年や担任任せにして十分な取り組みも成果も上げられなくなっ

ている学校も多い。中には総合を教科の補習や行事の練習等に充てている学校さえある。教師にとって教科横断的に指導する意味や効果が実感しづらく、どう取り組んだらいいのか具体的に分かりにくかったためである。また、教科横断的な指導計画というのは、ある学年や、ある先生、ある先生みの親イ・フライユに科だけが頑張っても出来る

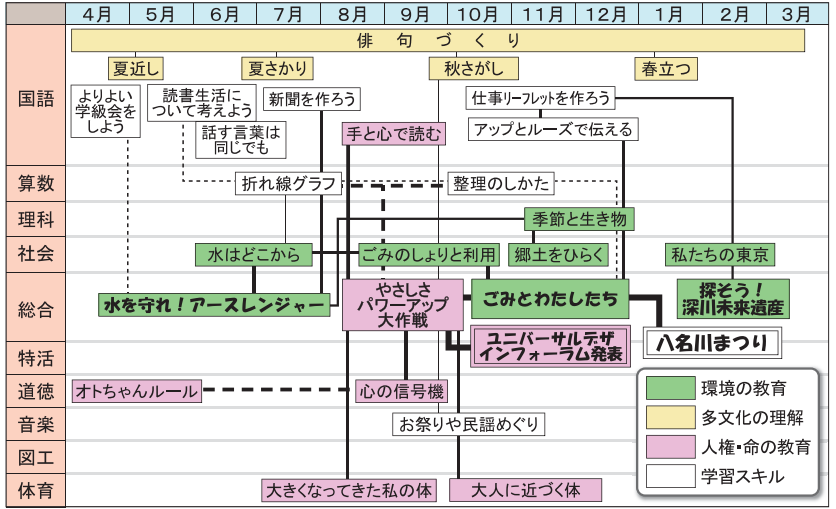
時間(以下「総合」)の創設時には、学校全体で取り組まないと進まないものであるにもかかわらず、学校の先生、校長、教員、保護者、地域の人たち、それぞれが、自分の役割をこなすことに注力していた。この課題を一気に解決するために、2006年に都内のユネスコスクールで開発された「ESDカレンダー」が注目された。この「ESDカレンダー」は、学校の単元や教科、領域を区別せず、統合的に取り組むことを目指している。また、環境(緑)、国

際協力(水色)、多文化の理解(クリーム)、人権や命(ピンク)といった視点から色分けし、同じ色同士をつなぎながら授業の関連づけや学習活動の発展、取り組みの深化を進めていくのである。例えば小学4年生の国語「手と心で読む」で点字の生みの親イ・フライユに代わり、時代や社会が求めている問題解決能力であり、創造的

「学校丸ごと総合化」を進めていくためには、まず自分自身がよく理解し、学校として何を、どのように学ばせ、何が出来るように育てるのかを考え、明確に示すとともに、少なくとも学年ごとの職員がそのような授業づくりに向かって連携・協力できるように指示し、そこから「学校丸ごと総合化」を進めていく必要がある。

このようなスタイルの学習をすることで、問題を立体的に力を入れて取り組む力、分りやすい表現する力、振り返る力、実生活に生かす力などを身につけていくのである。

■第4学年 ESDカレンダー



関係機関や地域等の人材等の情報をまとめた新しいESDカレンダーを開発し、使用中である。特に中学校や高校の教師は、自分の教科の授業さえ時間割通りにしていれば済むと考えがちである。校長としては、そのような古く狭い指導観では新しい時代に必要な資質や能力を育てることが出来ないことをまず自分自身がよく理解し、学校として何を、どのように学ばせ、何が出来るように育てるのかを考え、明確に示すとともに、少なくとも学年ごとの職員がそのような授業づくりに向かって連携・協力できるように指示し、そこから「学校丸ごと総合化」を進めていく必要がある。

八名川小学校では、このスキルも白色でESDカレンダーに入れるとともに、視点として、環境・多文化理解・人権や命といった持続可能な社会の実現に関係時間数・めあて・学習過程(江東区立八名川小学校校長 手島利夫)